

令和元年6月20日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21232

研究課題名(和文)「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育の可能性

研究課題名(英文)The possibility of Physical Education for learning the "knowing in practice"

研究代表者

高橋 浩二 (TAKAHASHI, Koji)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：20568224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育の可能性を提示することである。本研究では、運動実践者における「実践」の様態を明示し、実践を「情報」から「知」へと変容できる身体教育の可能性を提示する。それは、学習者の身体に「知」としての実践が構造化され、彼らの身体に「最適性」が存在することを自覚できるような教育である。「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育では、自らの身体を最適化して運動する能力の育成が運動実践の学習によって可能である。その身体教育の可能性は人間の可能性や最適化する能力と学習内容としての「実践の中の知」を対応させることによって見出すことができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「実践からの理論化」を目指し、実践の構造やその独自性の明示が新たな実践についての理論構築に向かうことを狙いとした。さらに、体育学独自の実践を提示し、それを基にした身体教育の可能性を論じた。これまでは、身体教育学においても「実践の内容」を対象とした研究が進められてきたが、「実践それ自体」が研究対象として扱われることは少なかった。本研究によって、情報を得る学習よりも、暗黙的で直観的な知である「実践の中の知」を得る学習こそが身体教育にとって重要であり、身体教育はその可能性があることが明らかになったと言える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to show the possibility of Physical Education for learning the "knowing in practice". In this study, we clarify the mode of "practice" in human movement practice and show the possibility of the physical education that can transform the practice as information into the practice as "knowing". It is the education in which the practice as "knowing" is structured in the learner's body, and they can be aware of the ability that they have a "suitability" in their own body. In a physical education for learning the "knowing in practice", we can train the ability which is "suit" one's own body by learning movement practice. The possibility of this education can be found by adjusting human capability and an ability of suitability to the "knowing in practice" as the learning contents.

研究分野：身体教育学

キーワード：実践の中の知 ナヴィゲーション 最適化能力 現象学 身体 運動実践 探索 自己制作

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

身体教育学においては、「実践の内容」を対象とした研究が進められるものの、「実践それ自体」が研究対象として扱われることは少なかった。それは、実践が「理論 - 実践」関係から捉えられ、理論に対する実践の先行性が問い返されてこなかったからである。本研究で着目する方向性は「実践からの理論化」であり、実践の構造やその独自性の明示が新たな実践についての理論構築に向かうことを狙いとしている。筆者は、「実践」の意味内容を検討し、身体教育における「実践」の独自性を見出す研究を進めている (TAKAHASHI, 2012)。人間の身体運動においては、「実践の中の知 knowing in practice」(Schön, 1983)が「状況における学習 situated learning」(Lave & Wenger, 1991)によって獲得される。しかし、その知は意図的に学習されることはほとんどなかった。したがって、その知を身体教育にどのように位置付けるかが課題となる。

(1) 「実践研究」は「実用的」と見なされることが多いが、その基盤には「実践の普遍性」を見出そうという思想がある。例えば、体育・スポーツ哲学領域において『スポーツ実践の思想』が取り上げられ、その思想と具体的な実践との関係が示されようとしている (例えば、田井ら, 2013)。そこでは、実践者の報告から共通する知を抽出しようとしているが、成果は挙がっていない。さらに、「実践それ自体」という問いは提出されておらず、研究の初期段階であると言える。また、「身体教育は身体(の育成)と動き(の習得)の関係に基づく実践領域」と規定し、「『動き』の『実践性』が体育の『実践性』を保障する」と主張する研究(杉山, 2008 及び2009)もある。この場合は、身体教育における身体と運動の関係を示しているが、実践の構造が示されている訳ではない。本研究は、これら先行研究を基礎づける役割を果たす。

(2) 体育実践を扱う体育科教育学では、「反省的实践」や「省察」等の用語が用いられ、体育教師の授業実践に対する認識論や教師教育論が展開されているが、授業実践についての反省や省察であり、本研究の主題となる運動実践は考察の対象ではない。体育授業を実践する教師が児童・生徒の運動実践を把握できるような理論が必要であり、本研究は理論構築の役割を果たす。

以上の学術的背景を受けて、本研究では身体教育における主題の一つとなる「運動実践」を現象学的に分析する。現象学は、事象そのものに迫るために直接経験に立ち戻り、学問の基礎づけを目指す哲学である (例えば、Husserl, 1973)。体育学における現象学的分析は、『身体の論理』(瀧澤, 1995)や滝沢の一連の研究(1992, 1998, 2014)などによって主張されているが、汎用性が高い方法とは言えない。研究代表者は、現象学の対象範囲と有効性を再考し、スポーツを含む運動の実践において確実な根拠を提示する現象学の有効性を主張した(高橋, 2015)。それは、現象学的方法を用いることによって、体育やスポーツに関わる実践について始原となる「運動を実践する主体」の側からの考察が可能であるという有効性である。したがって本研究では、これまでの体育学における現象学的方法を考察に組み込み、運動実践における「実践」の様態及びその知の構造を考察し、「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育の可能性を提示する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育の可能性を提示することである。これまで「実践」の多くは事例として考察対象になり、実用的な方向性が目指されてきたが、それらは運動実践者の立場から捉えれば情報の一つにすぎず、その情報の用い方は実践者自身が見出すしかなかった。本研究では、運動実践者における「実践」の様態を明示し、「情報」としての実践を「知」としての実践へと変容できる身体教育の可能性を提示する。それは、学習者の身体に「知」としての実践が構造化され、彼らの身体に「最適性」が存在することを自覚できるような教育である。本研究によって、身体教育において自明とされてきた「実践」概念を問い直し、

運動実践者に根差した現象学的身体論の展開が期待される。

本研究の目的である「『実践の中の知』の獲得を目指した身体教育の可能性」を提示するために、下位の研究テーマを設定する。まず、これまでの「実践」に関する知見を批判的に検討し、「実践」の意味内容を3側面（理念的、現実的、機能的）へ集約する。さらにこの集約から本研究における「実践」の様態を示す。次に、本研究の主題となる運動実践における「実践の中の知」の獲得過程を明らかにする。筆者は、運動学の知見を参考にして、身体運動の学習が発生へ転換する過程を分析し、「運動の安定化」の位相（位相C）において「身体運動の発生」が生じることが主張している。「実践の中の知」の獲得は、「運動の粗協調」（位相A）及び「運動の精協調」（位相B）においてなされ、位相Cの段階においてその知が充実し、身体運動の発生へ転換する（高橋，2012）。なお、この位相Cに留まらず、位相は進展し続け、「運動の制作」へと進展するだろう。つまり、身体運動を制作するためには位相があり、それは学習の段階から発生段階を経る必要がある。そのためにも「実践の中の知」の獲得過程を明らかにする必要がある。

以上の検討から、身体教育における学習内容の中心に「実践の中の知」を位置づける。さらに、その学習方法を「行為的实践を通じた最適性の獲得」として示す。我々が身体運動を実践する場合、実践の実用性を基に考えることは少なく、自らの運動能力や身体能力を基に考える。それは、「最適性suitability」が常に目指されていると言えよう。この「最適性」とは、「自らの（能為性vermögllichkeit に裏づけられた）身体に応じて運動を発揮する能力」（高橋，2015）と捉えている。それが瞬時の判断であったり、咄嗟の行動となって現れるのである。

3. 研究の方法

本研究では、現象学的立場から次の3つの方法を用いる。「実践」概念を構造化するための文献研究である。「実践」概念は3側面（理念的側面、現実的側面、機能的側面）に構造化できると考えている。文献研究の結果を基にした教育系学部所属の研究者や学校現場の教育者への面談である。この面談によって彼らの実践観を抽出し、「実践」概念の現実的側面を見出す。

現象学的考察の展開である。現象学的考察は、運動やスポーツという事象やそれを行う人間について、先行する科学的あるいは学問的成果への懐疑あるいは批判から、生きた人間の把握、人間の全体的統一的理解を可能にし、自らが反省し事象そのものへと向かう。この考察によって、運動実践者における実践を機能的側面として分析する。以上の3つの方法によってこれまでの実用的な研究として扱われてきた実践の領域を運動主体の側から捉え直すことが可能になる。

4. 研究成果

(1) 身体教育における「実践」の検討

本研究では、「実践」という概念を構造化するために、体育学における「実践」の根拠を検討した。体育学において実践が重要であることは自明だが、その意味内容は多様であり、不明確でさえある。体育学では、実践が教育実践、指導実践、体育実践、授業実践等として用いられてきた。体育科教育学においては反省的实践や省察といった術語が用いられ、教師の授業実践に対する認識論や教師教育論が展開されたり、体育授業で発揮される教師の技術を技術的实践と位置付けて実践が検討されている。他方、「協同的な学び」を基にした「体育における対話的学び」の実践研究も展開されている。すなわち、実践は一つの事例として紹介されたり、考察対象の一つとなっていることがわかる。一方で、体育哲学においてはスポーツ実践の多様性とその様相に一定の共通性があることやスポーツ実践と思考や実践と思想との影響関係について検討及び分析が試みられている。また、身体教育を実践領域と規定し、「動き」の「実践性」が

それを保障すると主張する研究もある。また、スポーツ運動学において、マイネルが実践経験は理論的認識に先行することや運動の本質を獲得するためには実践や直接観察・直接経験が必須であると指摘している（マイネル, 1981）。このように、実践についての研究は、その重要性や独自性を認めたり、その内容を示そうとしてはいるものの、そこで生み出される知が暗黙知、実践知、身体知といった既存の枠組みに留まっていたり、実践を前提にした論が展開されている。「実践の中の知」の内容を示すことによって実践を基礎づける必要がある。

(2) 「実践の中の知」の検討と体育実践への基礎づけ

Schön (1983) によって提案された「実践の中の知」は3つの特徴がある。意識しないままに実施の仕方がわかるような行為、認知、判断であり、それは行為の前や最中に考える必要はない。私たちはそれを学んでいるのに気づかないことが多く、その事実気づきだけである。

その知の生成を記述することは通常はできない。彼は、「行為の中の省察 reflection in action」と「行為について (on) の省察」が必要であると指摘している (Schön, 1983)。本研究においてもこの「実践の中の知」を省察する際に「in/on」を区別する必要がある。そこで、Schön における「実践の中の知」と本研究におけるそれを区別し、本研究における「実践の中の知」の射程範囲を検討した。その結果、人間の身体(能力)と密接に関係していること、「実践」の積み重ねによって身体(能力)の育成が可能であることが示された。「実践の中の知」は身体的な知性であり、自然科学的な知識とは別に捉えなければならない。

以上の内容を背景に、体育・スポーツ哲学研究者や学校教員との討議を実施し、実践の現実的側面を提出しようと試みた。その結果、体育において人が育つ動的な過程を捉えるという一つの方向性が示されたが、実践の捉えられ方が広範囲であること、その実践と体育やスポーツ教育との関係も多様であることが確認された。したがって、実践の根拠及び目的設定について検討する必要が生じた。例えば、現在の学校体育の目標である「生涯スポーツ」の検討である。学校体育の目標に「生涯スポーツ」を据えるのであれば、体育において「生涯スポーツ」それ自体を教材化して取り扱うことによって目的化する必要がある。また、学校体育の授業において用いられる「パフォーマンス」の意味内容が曖昧であったり、意味の混在が生じている。それを基づけるのは身体的行為による達成であり、それは運動実践によって可能になる。さらには、「実践の中の知」に基づいた「学びの地図～運動編～」の構想が必要である。それは、体育や保健の見方・考え方の基本にある「運動やスポーツの価値や特性」を、各領域を超えた「運動それ自体の特性」としてまとめて示すことの必要性から生ずる。その特性を基にした「学びの地図～運動編～」を作成することやそれらを用いて授業の実際に対応していくことは、体育科・保健体育科における運動領域を基づける知となり、身体教育における学習内容として「実践の中の知」を位置付けることが可能である。

(3) 体育学独自の「実践の中の知」の検討

体育学独自の「実践の中の知」の様態を明らかにするために、体育・スポーツ哲学、スポーツ運動学、体育科教育学等の関連する研究領域から「実践知」及び「身体知」を検討し、「実践の中の知」を特徴づけた。運動を実践するということは、実践者がある理論や形式として示されている運動を実施するのではなく、自らの身体によって構造化された運動を意図的に発生させることになる。言い換えれば、行為の中で知を生成し、その行為として発揮するのである。それが運動実践の中の知の生成である。身体教育における学習対象の一つは運動実践である。我々は、運動実践において「実践の中の知」を学習することができる。認知科学における身体知の研究では、身体知を学ぶ「からだメタ認知」が提唱され、実践によって結果として身体知が学習されると主張されている（例えば、諏訪, 2016, 2017）。認知と知覚の関係については、ノエ (2010) がエ

ナクティブ・アプローチから知覚経験が内容を獲得することについて検討している。エナクティブ・アプローチは、ヴァレラら（2001）によって提案された分析方法である。ノエは認知を「身体としてある行為」と捉え、エナクティブ・アプローチの特徴を2つ挙げている。すなわち、各種の感覚運動能力を有する身体の様々な経験に認知が依存すること、これらの各感覚運動能力自体がより包括的な生物的、心理的、文化的コンテクストに埋め込まれていること、である。人間の身体運動との関連から考えれば、感覚-運動的知識は実践的なものであり、理論的なものではないことや、行為が知覚に先行することが重要である。ここに運動実践における「実践の中の知」の一つを挙げることができよう。ノエに従えば、「知覚経験とは、感覚-運動的依存性に関する知識を活用しながら、また、思考を活用しながら、環境を探索する活動である（ノエ、2010）。すなわち、知覚経験という活動が「実践の中の知」を生成するのである。これまでの考察から、運動実践の中の知の生成は次のように示すことができる。まず、実践は人間の身体（能力）を前提としている。次に、実践に基づいた理解（知識化）がなされる。そして、「実践」の積み重ねによって実践者の身体（能力）の育成が可能である。結果として身体知が学ばれるだけでなく、意図的に身体知を学ぶことが可能である。

(4) 「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育において育てることのできる能力

本研究では、「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育において育てることのできる能力を2つ挙げた。すなわち、人間の身体が持つ「ナビゲーション」能力及び人間の運動実践において働く「最適化する能力」である。「ナビゲーション」は、運動実践における「行為の中の知」あるいは「実践の中の知」であること、その能力は身体を基盤としていること、その能力は人間の身体が持つ一つの能力であり、実践的である。さらには次の3点が重要である。自らの現在地（位置）の把握、身体的状態感への気づき、探索する能力の発揮、である。運動実践における「実践の中の知」は、運動実践を学習対象の一つとして扱う身体教育において意図的に学習することができる。その学習内容は、探索から得る自己や他者の身体の実感、判断から生ずる意味の自己制作、感覚-運動的知識・技能から成立する知覚内容への気づき、である。

この「実践の中の知」を学習するために必要な能力がある。それが人間の運動実践において働く「最適化する能力」である。その能力は、「自らの可能性に裏打ちされた身体に応じて調整する力」と位置づけることができる。この力はフッサール現象学における「可能性 *vermöglichkeit*」に基づいて説明することができる。「可能性」は、「*vermögen* 能力がある」と「*Möglichkeit* 可能性」を組合わせた造語であり、「現実の潜在性」から生じる「私はできる *ich kann*」によって裏打ちされている。この可能性は実践的である。我々が運動を実践する時、自らの身体的能力に応じて構造化する。この構造化の時に最適化が働き、構造を破綻させないように調整する。人間の運動実践は、身体的能力によって構造化された運動を意図的に発生させるということである。その能力は人間の可能性に支えられている。この可能性が「私はできる」を支え、「私はする」や「私は動く」を発生させる。

以上から、「実践の中の知」の獲得を目指した身体教育とは、自らの身体を最適化して運動する能力の育成が運動実践によって可能であり、その育成を身体教育が担えること、その可能性は人間の可能性や最適化する能力と学習内容としての「実践の中の知」を対応させることによつて見出せること、という結論が導き出された。

<引用文献>

- フッサール, E.: 浜渦辰二・山口一郎監訳 (2013) 間主観性の現象学 . 筑摩書房 .
マイネル, K: 金子明友訳 (1981) マイネル スポーツ運動学 . 大修館書店 .

ノエ, A.: 門脇俊介・石原孝二監訳(2010) 知覚のなかの行為. ナカニシヤ出版. No. 6, A. 2004. Action in Perception. The MIT Press.

ショーン, D. A.: 柳沢昌一・三輪建二監訳(2007) 省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考. 鳳書房. Schön, D. A. 1983. The Reflective Practitioner: How professionals think in action. Arena, Ashgate Publishing Limited.

ヴァレラ, F., トンプソン, E., ロッシュ, E.: 田中靖夫訳(2001) 身体化された心. 工作舎. Varela, F. J., Thompson, E., Rosch, E., 1992. The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience. The MIT Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

高橋 浩二 他、保健体育科における授業観察の「転換」の必要性 附属中学校における教育実習の授業分析から、長崎大学教育学部教育実践研究紀要、査読無、第18号、2019、39 - 44

久保田 もか、高橋 浩二 他、「ボール運動系」の学習から高まる運動能力の汎用性、長崎大学教育学部教育実践研究紀要、査読無、第18号、2019、11 - 17

久保田 もか、高橋 浩二 他、体育科・保健体育科における「学びの地図～運動編～」の構想、長崎大学教育学部紀要、査読無、第4巻、2018、147 - 154

高橋 浩二 他、体育科・保健体育科における「パフォーマンス」の意味内容についての検討、長崎大学教育学部教育実践研究紀要、査読無、第17号、2018、7 - 12

久保田 もか、高橋 浩二 他、なわとび運動に生かす運動リズムとタクト、長崎大学教育学部教育実践研究紀要、査読無、第17号、2018、1 - 6

田中 愛、高橋 浩二 他、「実践からの体育・スポーツ哲学」の再検討(2年目) 「身体が育つ」ための知の諸相 実践からの哲学が何を明らかにし得るか、体育・スポーツ哲学研究、査読無、第39巻1号、2017、49 - 62

森田 啓之、高橋 浩二 他、生涯スポーツ(論)と学校体育(2年目) 生涯スポーツにつながる学校体育のあり方、体育哲学研究、査読無、第47巻、2017、41 - 54

〔学会発表〕(計8件)

Koji TAKAHASHI, An ability of suitabilization in human movement practice, 46th Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport, 2018

高橋 浩二、身体教育における学習内容としての「実践の中の知」、日本体育学会第69回大会、2018

Koji TAKAHASHI, The ability of "navigation" in human movement practice, 45th Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport, 2017

Koji TAKAHASHI, The "knowing in practice" and human body in movement practice, 2016 国際運動哲学学術研究会(招待講演)、2016

高橋 浩二、体育授業における「パフォーマンス」の意味内容、九州体育・スポーツ学会、2016

〔図書〕(計1件)

高橋 徹、田中 愛、高橋 浩二 他、みらい、はじめて学ぶ体育・スポーツ哲学、2018、176(61 - 73)

6. 研究組織

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。